

# いの流水俳壇

松尾 満津於選

## 「当季雑詠」

四圍の山包み隠して黄砂来る

刈谷 志津

(評)何も説明が要らなくて風景がそのまま浮かぶ句である。ただ「黄砂」という季語を探してみたが、歳時記にも国語辞典にも見当たらない。三月頃から五月頃にかけて、中国大陸或はモンゴルに堆積した黄色い砂が吹き上げられて偏西風に乗る、地球の自転と相俟って、日本に飛来する。日本ではその起きる現象を「かすみ」と稱してきたのではなからうか。歳時記にないのはそのためと云えば説明がつく。異論があれば何方か教えてほしい。

しばらくは名残り惜しみて離しまふ

中野 好子

(評)正岡子規の句に「離あらば娘あらば」と思いけり」という句がある。離がありそれを飾ることのできる子供もあるとしたら、どれほどかうれい離祭りになるであろうが子規には子供がなかったというから、この句は子供のない淋しさを詠んだ句であるのだろう。中野さんにはそれをよろこぶ子供も在る事だし名残り惜

しいのは次の祭りまでのこと、お祭り出来る本人が健在するに越した幸せはない。来年はもうすぐそこにある。

チュリップ一年生の上に並び

秋田 律子

(評)成程、言われてみると「チュリップ」が如何にも初めて入学する、小学新入生のように見えるから不可思議である。ハイ両手を前に伸ばして、先生の方をみて：真直に並んで、こちら向いて静かに教室に入ります。その緊張したみずみずしさ。一年生の上にはようにを縮めて云ったもの。チュリップは他と交らない独得の容姿がある。

日向ぼこ独りのときは猫をだき

筒井 文

(評)冬の日のあたたかい光につつまれて暖をとっているのが「日向ぼこ」である。なるべく風の来ないような処で病弱な人、老人、幼児等が、日向ぼっこを楽しむ。そんな老人、幼児の側にあつて心を癒してくれるのに適度な、可愛らしさ、温りを持っているのが猫の存在である。犬は人に懐くが、猫はどんなに可愛がって育てても信から人に懐くことはない。が主人を頼り主人の心を癒してくれるのに適度な可愛らしさと温りを持っている。「日向ぼこ」に象徴される山村の様子を平明に詠み得て妙。

倒木をくぐりてよりの春の水 岡本とも子

着ぶくれて孫の手という便利もの 竹崎 光子

飾らることなく箱に古雛 大川 節弥

庭ぬちにはほっこり覗く福寿草 川村 博子

地蟲出づ土佐の福ちゃん原画展 植田 紀子

賽銭の音の確かに社の春 友草 水月

水面ゆれおたまじゃくし生きる音 間 浩一郎

遠き日の雛持ち出す蔵の町 井上 郁子

落のとう親子の絆ほろ苦し 森元二美子

白梅や初恋の色醸し出す 森岡 照月

春浅しクジラドームの落成す 川上こよね

野火猛る待機の漢みな無口 津田 久美

初燕軒を伺う深庇 片岡 包女

仏壇の仏もこぼす今朝の寒 小島 良

畦を焼く涅槃の虫に頼みいる 楠目 哲郎

そこここと杖をのばして福寿草 弘瀬うき子

水ぬるむ目高の泳ぐ溝恋し 川村 愛

吹き抜けて風通りゆく枯野原 筒井 一平

指揮棒は鳥の歌なり山笑う 伊藤 たみ

行楽の親子三代福寿草 松尾満津於

次 題 「当季雑詠」  
締め切り 毎月15日

投句先

吾北教育事務所 上八川甲2010

867-2133

平成19年度

## こども川柳年間優秀作品

### 入選作品

### 最優秀賞

あきつは こころをよす おまじない

枝川小2年 蔵川 真実

### 優秀賞

ふゆの花 ふきのとうだよ きれいだね

下八川小1年 曾我はるか

えんそくで 雨がふらずに よかつたな

伊野小2年 森木 なゆ

お母さん おるとこわい おにのかお

伊野小4年 吉良 友宏

### 入選

やめようね まいあれの ランドセル

伊野小3年 川村 遥

落語部は おわらいとて うれしなき

神谷小4年 坂本 志織

たものは 大事にしよう 命のもと

神谷小4年 野口 瑞絵

大切な 地球を守ろう ぼくの手で

下八川小5年 大久保貴史

春になり 山はピンクの きものきる

伊野小6年 上田 由夏

青い空 世界の果てまで 続いている

川内小6年 國澤 優花

※学年は、平成19年度中のものです。